



浅野忠利

●基礎課程の位置づけ

バウハウスの流れをくむウルム造形大学の基本的なコンセプトは初代校長マックス・ビルによって導入された。マックス・ビルは1908年12月22日スイスに生まれた建築家であり、あらゆるジャンルのデザイン制作に携わった。1927年から1929年にかけてデッサウのバウハウスでワシーリー・カンディンスキー、パウル・クレー、オスカー・シュレンマーなどから学んでいる。1953年のウルム造形大学の開校の当たっては、バウハウスの伝統を受け継ぎ「美術と科学の統合」を目指す新しい造形教育機関を謳った。バウハウスの伝統を思い起こさせる最も魅力的なカリキュラムは第一学年の基礎課程である。この基礎課程は開校当初は各学科共通に造形基礎課程の位置づけであったが、マックス・ビルが去った1958年から、各学科固有のプログラムが展開されるようになった。建築学科は、前回にも述べたように、専門知識を習得済であることを条件としており、特に高いレベルの基礎過程が展開された。1962～63年の建築学科の基礎課程と1962～66年の基礎課程における学生の作品を紹介する

●建築学科基礎課題 1962～1963の内容

・造形への導入部としての建築学科の作業

この講義と実習は、建築造形に必要な基本として、2次元・3次元空間の幾何学的知見を得ることを目的とする。ここで学ぶ法則は建築空間を創出する手段として有用である。即ち、依存や連結の影響の大きさに秩序を与えることが出来る。この影響の大きさはある時は単純に、ある時は複雑に見えるが、例えば力、方向、流、強度、重心、繋がり、材種などを表すことが出来る。

・基礎課程の課題（年間総計 532 時間）

課題1～6：基礎的平面格子とその合体平面格子・平面格子の変形による造形・交通網を平面格子ににませ換える・

輪の分割による造形・一枚の紙による造形・視覚的課題を持つ平面格子の造形（以上6課題各12時間計72時間）課題7～11：構造的課題を持つ平面格子の造形・システムの異なる二つの平面格子の結合・基礎的立体格子とその合体立体格子・宙に浮く立体格子構造の固定・鋼構造による塔の設計（以上5課題各44時間計220時間）課題12～15：平面要素による空間構成の造形・空間容量の編成・面材と線材による造形・普遍的中空体によるカバーデザイン（以上4課題48, 96時間計240時間）

・作業場所

課題1～6は工房を使用せず、学科の教室で行う。残りの課題は工房で、工房マイスターの指導により行う。工房の設備の使用にはウルム造形大学の規則が適用される。

・作業材料（さらに詳しい条件は各課題ごとに設定する）

材料は、製図については、A2版の白い厚紙を使用する。記述する内容や題名はそれぞれ課題により設定される指示に従うこと。文字の高さは2, 5mmと5mmに限定すること。模型の台はA2を超えないこと。設計プロセスを示すスケッチは、日付、頁数を付けて、白いA4の紙に纏めて提出する。このスケッチは成果品とみなして評価の対象とする。

・作業過程

設定されている課題は設定されている時間内に完了しなければならない。標準的な作業工程は、課題に係る基本事項の講義に始まり、課題設定・作業と指導・作業の完了と続き、最終結果の評価と採点をもって一つの課題は完了する。

●建築基礎教程における学生の作品（頁下に6例を示す）

課題に対する成果品は図面と模型である。模型は素材は課題ごとに設定されるが、木、石膏、金属、プラスチックそれぞれの工房で工房のマイスターの助言を得て、作成される。平面格子と立体格子という二つの道具（手法）により、驚くほど自由で豊かな成果が得られている。

